

『リチャード二世』における両性具有のイメージ

松 浦 雄 二 ・ 松 浦 芙佐子
(英文教室) (岡山商科大学)

Androgynous Imagery in *Richard II*

Yuji MATSUURA , Fusako MATSUURA

キーワード：エリザベス一世, 両性具有, リチャード二世

1 緒 言

『リチャード二世』は、何らかのかたちで主人公の「女々しい」性格について言及されることが多い作品で、その性格が主人公に対する讃美と攻撃の両極端をも招いてきたことは周知の通りである。多くの場合、シェイクスピア悲劇の主人公は、劇の当初において自分のおかれた状況や自己（の欠点）に対する客観的認識が欠如しており、一方、劇を鑑賞する観客（或いは読者）には、その主人公の認識欠如を認識させるような仕組みになっている。劇が展開していくと、艱難の道を歩む主人公は序々に自分の欠陥に気づいていき、それによって観客（読者）との認識の差は縮まって、主人公は観客（読者）の共感をかち得ていく。すなわちわれわれ鑑賞者には、劇における状況を認識する上で優位な地平が与えられていて、劇が展開するに従って主人公がその地平に近づいてゆくのである。その近づき方と到達した地点の如何が悲劇的効果の有無大小を左右するともいえるが、『リチャード二世』の場合、主人公リチャードの「女々しさ」や、自分の非を認めながらも完全には悟りきれていないような一種の往生際の悪さなどは、やはり鑑賞者の共感をそぎがちなマイナス面になることが多いであろう。小論では、エリザベス

朝の観客達の観劇体験の中で形成し得たのではないかと思われる両性具有のイメージを、エリザベス一世との関連から検討しつつ、リチャードの「女々しさ」について考察したいと思う。

2. 両性具有としてのエリザベス一世

女性はアダムのあばら骨から作られ、神によって「彼がお前を支配する」と告げられた（創世記1. 3）。聖書を根拠として女性が男性の従属物であると考えられたような時代に、女性が国家の統治者であることは自然の摂理¹⁾、万物の秩序に逆らうことであると¹⁾考えられた。これに対してメアリ・テューダーは“the female Prince”という両性具有の概念を取り入れ、女性支配の正当化を試みた。しかし、メアリ・テューダーのフェリペ二世との結婚は、女王の夫による英国支配、カトリック教徒の英国支配への不安と融合し、女性支配²⁾=アナキズムという連想を強化する結果となった。これに続くエリザベスは、メアリから「王の二つの身体」の概念を受け継ぎ、積極的に政治的に利用した。Middle Temple の法研修生であった Edmund Plowden の記述に拠れば、その概念は次のようになる。

... the King has in him two Bodies, viz., a Body natural, and a Body politic. His Body natural... is a Body mortal, subject to all Infirmities that come by Nature or Accident, to the Imbecility of Infancy or Old Age, and to the like Defects, that happen to the natural Bodies of other People. But his Body politic is a Body that cannot be seen or handled, consisting of Policy and Government, and constituted for the Direction of the People, and the Management of the public weal, and this Body is utterly void of Infancy, and Old Age, and other natural Defects and Imbecilities, which the Body natural is subject to, and for this Cause, what the King does in his Body politic cannot be invalidated or frustrated by any Disability in his natural Body.³⁾

これを応用すると、女王の「自然的身体」“the Body natural”がか弱い女性であっても、「政治的身体」“the Body politic”は国王のものであり、男性的能力と精神を伴っている。それゆえ、統治者として女王の存在は可能なのである。⁴⁾

更にエリザベスは「王の二つの身体」の理論とともに、自己を両性具有とみなすレトリックを使用して、自らが女であり男であり、国王であり女王であると、家父長制社会における自己の国王としての“the Body politic”の位置付けを明確にし、女性統治から起こる国家不安を取り除こうと努めた。例えば、エリザベスが自己に言及する場合、‘princess’よりむしろ‘prince’という男性化された形容語を好んで用いたことなどはその一端を示すものであろう。さらに、老いては‘king’を使用した例もある。‘Queen Elizabeth’s speech to her last Parliament’に次のような下りがある。

... To be a king, and weare a Crowne, is a thing more glorious to them that see it, then it is pleasant to them that beare it, for myself, I never was so much inticed with the glorious name of a King, or the royall authoritie of a Queene,....⁵⁾

このように女王が自らを“a King”であり“a Queen”であると明言している。これに並んで、初期には‘princess’であった女王への呼びかけも次第に性的に曖昧な‘the Queen’s most excellent majesty in her princely nature considering’や‘Monarch and prince sovereign’などに変化していったことも指摘されている。⁶⁾

また、エリザベスはベルフィービーや、アストライア、ダイアナ、グローリアーナなどにたとえられた。それと同時に、聖ジョージ、ダビデ、モーゼ、ソロモン、アレクサンダー、アイネイアスなどの男性のヒーローで描かれることもあった。⁷⁾

更にエリザベスはその自然的身体を政治的身体に従属させるため、公には処女として妻と母の役割を放棄した。家父長制社会では女性は男性との関わりにおいてのみ、すなわち誰その妻であるとか母である、ということによってのみ、その存在が認知された。メアリ・テューダーが妻でありかつ君主であろうとしたのとは反対に、エリザベスは妻であることによる「女性性」を強調せず、むしろ処女という社会的には例外的な立場において、君主としての精神的男性化を可能にしたのである。⁸⁾

このようなレトリックのおかげで、エリザベスの両性具有という考えは、当時の教育のある国民には、ある程度知られていたと考えられ、肉体的にも両性具有ではないかといううわささえもあったようである。⁹⁾君主が女性であることによって生じる政治的不安を解消するために、両性具有のレトリックは有効であったかもしれない。しかし、処女王としてのエリザベスには世継を生めないという問題があった。¹⁰⁾私生児が生まれそうであるとか、エドワード六世が実は生きていて、などの様々なうわさがその不安を反映している。また、プロテスタントの女王としては、プロテスタントでは独身による貞潔よりも、結婚による貞節を重んじたため、立場上の問題があった。更に、1590年代後半には、宮廷人の道徳的堕落、国家の経済的問題の深刻化がすすみ、女王の老齢による王位継承問題がますます顕著になってきたのである。¹¹⁾

3. ルネサンス期における両性具有

前章では、エリザベスの政治上の両性具有のレトリックについて考察して来たが、ルネサンス期において両性具有はどのように捉えられていたのだろうか

か。古代からルネサンス期にかけて両性具有の概念は必ずしも否定的なものではない。実際に生物学的に両性具有の子供が生まれた場合には、神の怒りの徴として抹殺されはしたが、概念としての両性具有は、むしろ “an ideal goal — a vision of unity and harmony”¹²⁾, “an ideal state of personal wholeness”¹³⁾ などの肯定的な意味合いを持っていた。

シェイクスピア劇においては、例えば、しばしばヒロインの男装が見られるが、変装による女でもなく男でもない両性具有状態は、ヒロインを女らしさという社会的抑制から解放し、ヒロインの人格や自我を拡大する社会的自由を与え、理想である「完全性 (“wholeness”)¹⁴⁾」へと通じさせるという見解がある。ただし、最近のフェミニズム批評では、ヒロインの男装への逸脱は一時的な現象にすぎず、最終的には婚姻を通じ、「妻」という社会的な枠組みの中に取り込まれ、家父長制度を強化する結果になっていると指摘されている。エリザベスが両性具有のレトリックを利用したやり方も、同様に、家父長制を強化するものである。両性具有によって、女性特有の弱さ、虚栄、その他の悪徳をカバーし、男性の長所である肉体的、精神的強靱さを備えていると主張するなら、男が女より優れており、女は男に従属すべきであるという当時の社会通念に基づいていると言えよう。

さて、この他、どのような両性具有の概念が存在したであろうか。例えば、男女の結婚の秘蹟を示す両性具有のエンブレムはエリザベス朝において一般に知られていたようである。プラトンの『饗宴』でのエロスについての議論で、アリストパネスが述べる原人間には両性具有タイプもいた。「今日男、女二種類であるのとは違って、第三のものがさらに加わっていたのである。この第三のものは男女両性を合せ持つもので、…そのもの自体はすでに消滅してしまっている。」これらの人間は驕慢であり、神々に刃向かったため、ゼウスは「[ゆで] 卵を髪で切る人がするように、人間どもを2つに切っていった。」しかし、本来の姿が2つに断ち切られた人間は、「皆それぞれ自分の半身を求めていっしょになった。そして互いに相手をかい抱きまつわり合って一心同体になろうと熱望し¹⁷⁾」た。つまり、人間は一つのを二つに断ち切られたのだから、それぞれの半身を探し求めるのである。愛とは「根源的完全性 (“that original wholeness”)¹⁸⁾」への探求、願望と

定義される。¹⁸⁾ Robert Kimbrough はシェイクスピアがプラトンのこの両性具有の起源について知っていたであろうと推論し、婚姻による両性具有の例として次の *King John* の一節を引用している。

He is the half part of a blessed man,
Left to be finished by such as she,
And she a fair divided excellence,
Whose fulness of perfection lies in him
(II. i. 437-40)

このような、婚姻によって男女が根源的完全性に到達しようとする両性具有の概念に並んで、両性具有を神への回帰願望と関連させる見解も多い。オリエントの神を初めとして、様々の宗教において両性具有の神の存在が示されている。例えば、ギリシア・ローマ神の系譜では男であり女である乳首のあるゼウス、キプロスの髭のあるアプロディートス、イタリアのはげたヴィーナス、両性のディオニソスや女装したヘラクレスなどの例がある。²⁰⁾ また、ユダヤの伝説には両性具有である神を模して創造され、エヴァが分離されるまでは両性具有であったアダムの存在があることが指摘されている。²¹⁾ 特に、ミルチャ・エリアーデはグノーシス派の見解を解説し、「人類がアダムの後裔であるという事実によって、男・女は潜在的に誰にでも存在し、精神的完成はまさしく自己自身の中に両性具有を回復することにあるのである」と述べている。²²⁾ また、ルネサンスでは実在の人物と考えられていたメルクリウス・トリスメギストスは神を「男女両性の豊饒に満ちた者」と呼んでいる。²³⁾ また、グノーシス派の聖典の1つに数えられる新約聖書外伝の「トマス福音書」にはイエスが弟子たちに向かって言う「あなたがたが、2つのものを1つにし、…男がもはや男でなく、女がもはや女でなくなるように、汝らが男と女を1人にするならば、その時汝らは〈王国〉に入るであろう。」(語録22) という両性具有を示唆する言及がある。この言葉に関して、荒井献の指摘によれば、3世紀から17世紀にかけてキリスト教徒によって広く話されたコプト語では、「2つのものを1つに」の「1つ」には “oua” が、「男と女を1人に」には “pioua ouot” が区別して使用されており、それぞれ “oua” は「唯一性」(oneness), “pioua outo” は「1つであるすべての者」(all who are one) にあ

たる。²⁴⁾この唯一性、1つである者の概念は、新約聖書においてもしばしば見受けられる。例えば「ヨハネによる福音書」(17.21-23)、「ローマ信徒への手紙」(12.5)などである。このように、完全性の象徴としての両性具有の概念は、プラトン、ネオプラトニスト、錬金術師、キリスト教グノーシス派の人々などの間でみられるのである。

さて、これらの考えはルネサンス期の英国においてどの程度知られていたのだろうか。例えば、グノーシス派は中世の異端弾圧の中で最後の末裔であるカタリ派が消え去り、実際問題でなくなった時、ルネサンス期にオカルト神秘主義として「再発見」された。²⁵⁾John S. Mebaneによると、ネオプラトニズム、グノーシス主義、カバラ、ヘルメス主義やヒューマニズムが折衷した形式のものにクリストファ・マーロー、ベン・ジョンソン、シェイクスピアらは馴染みがあったであろうと考えられている。²⁶⁾特にマーローのファウストの主人公は「グノーシス的異端の創始者の1人の末裔」とみなされている。グノーシス派のシモンがラテン語で「ファウストゥス」という異名を用い、「トロイアのヘレネの生まれ変わり」と称するヘレネを同伴していた」ことから、シモンが「初期ルネサンスのファウスト伝説の起源の1つ」であると考えられているのである。²⁷⁾

また、明らかな君主への追従として、完全性の象徴としての両性具有の概念が利用された場合もある。国王の両性具有化は先に見たエリザベスのように女性の弱点を補うため、女性君主が使用する場合だけではない。錬金術からの概念を利用した、フランスのフランソワ一世(在位1515-47)のヘルマフロディーテとしての肖像画に男性君主の両性具有を見ることが出来る。²⁸⁾肖像画の献辞には「そも彼の人への榮譽は同時に/ミネルヴァ、マルス、ダイアナ、アモール、メルクリウスへの賛辞なり。」とあるが、ヘルマフロディーテは錬金術の変容の頂点であるとみなされており、両性具有が「普遍的な人間を表すイメージ」として広く受け入れられていたことがわかる。²⁹⁾

このように様々な両性具有の概念がルネサンスにも既知のものであったことが解るが、男であり女であり、同時に、男でもなく女でもないこの両性具有状態についてのエリアーデの見解は大変興味深い。両性具有は、対立するものの再統一、原初の未分化の状態への回帰、超人間的、超歴史的な状態を回復する事、すなわちエリアーデの言葉をそのまま借り

れば、「歴史的時間の中では維持することが不可能な逆説的状况」を回復させる機能を持つのである。³⁰⁾シェイクスピアが両性具有をどの宗教から、どのような概念を持つものとして取り入れたか限定することは出来ないとしても、完全性、統一性の象徴であると理解していたであろうことは推測が可能であるように思われる。

4. エリザベスとリチャード

“I am Richard II. know ye not that?” “... this tragedy was played 40^{tie} times in open streets and houses.” ロンドン塔記録保管係 William Lambardeの覚書に残されたエリザベス一世のこのことばは、演劇の持ち得た政治的な意味合いについて考えさせられる記録である。³¹⁾「この悲劇」が何を指すのか、特定されてはいないが、現代の批評家達も、シェイクスピアのリチャードのさまざまな点にエリザベス一世との関連性を検討しているようである。

当時、劇が政治的に解釈された可能性があるかどうかについて、Leah S. Marcusは、シェイクスピア喜劇のヒロインたちがエリザベスを反映していたとして、ロザリンド、ビアトリスなどの例を挙げながら説明している。ヒロイン役を演じるために女装している少年俳優たちが、更に劇中で男装をしていくことによって、Marcusのことばを借用すれば、男性・女性という「性的アイデンティティーを重ね着すること」によって、男女両方の性的アイデンティティーを獲得しながら困難な状況を解決していく姿は、言語によって造りあげられたエリザベスの両性的イメージの複製なのである。³²⁾

しかし、男性であるリチャードとエリザベスはどのように関連付けられるだろうか。『リチャード二世』とエリザベスを関連させた解釈の幾つかを紹介すると、例えば、エリザベス在位中に出版された台本からリチャードの退位の場面が省略されていたことが、エリザベスのリチャードへの同一視を説明するというものがある。³³⁾Peter Ureは『リチャード二世』が政治的アレゴリーだとするならば、リチャードとエリザベスそれぞれののアイランド問題の処理に関連して、エセックスが立派なボリングブルックになったであろうと指摘している。³⁴⁾また、家父長制社会の中で世継のいないエリザベスの位置と、劇中、父子関係が欠落しているリチャードの孤立を関

連させる見方もある。³⁵⁾

男であり女であるのが両性具有であるが、当時ルネサンスでは「男らしさ」・「女らしさ」はどのように考えられていただろうか。当時の女性嫌悪者の定義によれば女性は“vain, capricious, self-indulgent, garrulous and stupid”などと形容されているが、³⁶⁾一方、女性の美德・肯定的意味は“mercy, patience, temperance”などに見られる。特に女性の弱点は“effeminacy”であり、女々しい男は“effeminate”であった。反対に、男らしい女の長所はその「男らしさ」——合理性、勇気、肉体的剛健さにあり、家父長制社会を強化するものと考えられた。また、否定的な男らしさも存在し、暴君や暴漢の残酷さが挙げられる。³⁷⁾

このような「男らしさ」・「女らしさ」の概念は必ずしも生物学的な性と一致しないという考えは、エリザベスの‘female prince’としての立場を可能にした。女性であっても、その政治的身体によって男性的な理性、勇気、剛健さを持つことが出来るのである。この点から考えると、M.C.ブラッドブルックが指摘するように、エリザベスは『リチャード二世』よりむしろ現実的で冷徹なボリングブルックと考える方が適当かもしれない。この場合、リチャードは崇拜者に取り囲まれ甘やかされたエセックスたちである。³⁸⁾つまり、女性であるエリザベスは自分の性とは反対の男性原理を利用して、統治していた。一方、男であっても女性の女々しさを持った男も存在する。『リチャード二世』はエリザベスとは反対に女性原理を用いて思考し、行動しているのではない。彼の「女々しさ」は諸家が指摘する特徴であるが、リチャードが「女々しい男」であるということと、両性具有的イメージとが関連する可能性を、五幕五場の独白に至る台詞の分析によって、次に考察してみたい。

5. 五幕五場の独白に向けて

両性具有とは、男であり女であり、また、男でもなく女でもない状態である。そして現実には生物学的に存在するならば、神の怒りが世に顕されたものとして抹殺されてしまうのであるが、概念的には統一と完全性を象徴する理想化された、逆説的存在である。

『リチャード二世』には逆説があふれている。例えば、リチャードがボリングブルックに王冠を与え

る譲位の場面は、Alexander Leggatt が指摘するように、すぐれて逆説的である。自らの王位を廃してそれを他者に譲位するという行為は、自らが王なればこそ可能なのである。³⁹⁾王であって王でないリチャードに対して、同様にボリングブルックも王であって王でない。ヨークは即位後のボリングブルックを“king Henry”とは呼ばず、“Bullingbrook”と呼んでいる（V. ii. 39-40）。エデンの園であるはずの英国はゴースト自身の息子によって最終的にエデンから遠いものにされてしまう。『リチャード二世』の世界は、正しいものと間違っただけのもの、真実と誤りが相互入れ替わり変化してしまう混沌と逆説に満ちた世界である。⁴⁰⁾

リチャードは王なのか、王でないのか、リチャードとボリングブルック両者ともに王なのか。リチャードは男なのか、女なのか、それとも両性具有なのか。この点を考察するために、まずリチャードの家父長制社会のなかでの位置付けをみてみることにする。

先に述べたように、リチャードにもエリザベスにも直系の世継はいない。男性中心の社会構成においては後継ぎとしての男子を儲けることは重要である。リチャードと対照的にボリングブルックには父ゴーストとの関係が強調され（II. iii. 116-127; II. iii. 106-110）、劇の後半では本作品には登場しないハルへの言及で新たな親子関係が示されている。ヨークとオーマールの親子関係もいささか喜劇的に五幕二場で示される。さらにエドワード三世を父とするゴーストやヨーク、グロスターたちの親子関係もグロスター公夫人の台詞の中で樹木と瓶に入った血のイメージを平行させることによって生き生きと示されている（I. ii. 11-21）。もちろん、リチャードもこの枠組み、エドワード三世の血を受けた男たちの中に含まれており、リチャードとエドワード黒太子との容姿の相似がヨークによって指摘される（II. i. 176）。しかし、リチャードはその社会の中で要求される事柄、その枠組みを維持し、発展させて行く役割を果たしていない。むしろ、グロスターを暗殺し、ボリングブルックの財産を没収し、エドワード三世からの系譜を破壊し、途切れさせるような行動をしているとして、血をすするペリカンの隠喩（II. i. 126-27）や、血で手を汚すイメージ（II. i. 182-3）によって批判を受ける。家臣たちも王によって自らの血筋を脅かされることを不安に思う（II. i. 245）。また、国王なら勇敢に戦争を

して国土の拡張を図るべきであるものを、反対に国土を縮小され、戦争を避けるために金を使う臆病者であると批判を受けている (Ⅱ. i. 109-114; 279-81; 252-5)。ノーサンバランドによれば “The king is not himself,” (Ⅱ. i. 241) であり, “The king grown bankrupt like a broken man.” (Ⅱ. i. 257) のようにリチャードはもはや国王らしい国王では無い、ただの人に過ぎないのである。

このように、劇中のリチャードは男性社会を維持させる、発展させる責任のある立場にありながら、それを果たしていない。エリザベスのように女性が男性的価値を体現しているなら、家父長制を強化する結果となり、社会的に何ら問題はない。しかし、男性が男性的価値を維持しないなら、それは女性の男性化よりはるかに大きな問題となるのではないか。

さて、国家の最高責任者である女王のような特殊な存在は別にして、普通の女性の地位は、家父長制社会を存続させる男子の母になることでしか保全されなかった。ボリングブルックの母やハルの母は、劇中、一言も言及されず、特定もされない。父子関係が堅固である場合には、母親の存在など問題にならないのであろう。ヨーク公夫人が息子オーマールの命乞いをする、見様によっては滑稽とも写る場面では、その懸命な姿に母の愛が浮き彫りにされるだけではなく、家父長制社会の中で女性が注目されるのは「母」であるときだということをも示しているのである。一方、リチャードの妃には子はいない。歴史的にはこのときの王妃は、まだ10歳に満たないフランスのイザベラであったが、劇中では愛を知るに足る女性に変えられている。しかし、家父長制社会で子を生んでいない王妃にどれだけの価値があるだろうか。

家父長制社会の中で世継がないことは、エリザベスの場合と同様に、社会不安を生み出す一要因となる。劇中、ボリングブルックを取り巻く父と子のイメージが繰り返されるのは、リチャードに比べてボリングブルックの安定を示唆するためかもしれない。劇中の母の存在に注目すると、ヨーク公夫人は別として、ボリングブルックとハルの母親が共に示されており、代わりに英国が、その母として示されている。例えば、英国を追放されるボリングブルックの “My mother and my nurse that bears me yet.” (Ⅰ. iii. 305) やゴントの言う “This nurse, this teeming womb of royal kings” (Ⅱ. i. 51) の

ように。王の母、王を孕む子宮としての英国は男性中心の社会からの視点である。しかし、リチャードは英国に対して、英国の息子ではなく、英国の母のように接している。

Dear earth, I do salute thee with my hand,
Though rebels wound thee with their horses'
hooves.

As a long-parted mother with her child
Plays fondly with her tears and smiles in
meeting,

So weeping, smiling, greet I thee, my
earth,

And do thee favours with my royal hands.

(Ⅲ. ii. 6-11)

国土に対して、その息子でなく、母のように接するリチャードは、ボリングブルックに代表される男性社会の行動パターンから逸脱している。作品中、英国は一貫して女性性で言及されるが、リチャードにとっては母でなく子供であり、臣下なのである。この男性的視点からの逸脱は、リチャードの立場の不安定さを示すが、同時に、劇中において男性中心・家父長中心の社会が絶対的正義を保つことができなくなったときに、男性的視点から逸脱し女性の「女々しさ」を持った男であるリチャード——女のような男のリチャード——が、更には逆説的存在である両性具有者となる可能性が生じるのである。

劇中の他の男性たちは、自らの血筋の連続について言うとき、男性を中心にした語を使用する。例えば、ゴントの “Oh, had *thy* grandsire with a prophet's eye / Seen how *his* son's son should destroy *his* sons,” (Ⅱ. i. 104-5 : イタリクスは筆者による) のような台詞に、男性中心の考え方が見られる。しかし、同じ主題をリチャードが語るときは、女性の立場が入り込んで来る。

But ere the crown he looks for live in peace
Ten thousand bloody crowns of *mother's* sons
Shall ill become the flower of England's
face,....

(Ⅲ. iii. 95-7 : イタリクスは筆者)

先に、ボリングブルックには母、妻の存在が欠落していると述べたが、ましてやボリングブルック自身が母の立場に立つことなどあり得ない。“Son’s sons”と言う表現は可能であってもボリングブルックには“mother’s sons”という表現は思いもよらないものであろう（もちろん、子を孕み子を産むのは女性なのだが）。実際、ノーサンバランドはボリングブルックの使者として、エドワード、ゴント、ボリングブルックと続く血筋にかけて誓いを建てるのである。

And by the honourable tomb he swears,
That stands upon your royal grandsire’s
bones,
And by the royalties of both your bloods,
Currents that spring from one most
gracious head,
And by the buried hand of warlike Gaunt,
And by the worth and honour of
himself,
(Ⅲ. iii. 105–110)

だが、リチャードに忠誠を誓ったこの誓言が破られ、観客の批判がリチャードの失政からボリングブルックの王位篡奪へと移って行くにつれて、この男性社会の血の流れが何か空しいものに変容して行く。この辺りからは、むしろ、男性中心の家父長制社会から逸脱しているリチャードに観衆は共感し始めるのである。

さて、リチャードの母性的表現に加え、親子関係の欠落したリチャードと王妃には、思考の中で子を孕み産む可能性がイメージとして示唆されている。王妃の次の台詞を検討してみたい。

So, Green, thou art the midwife to my woe
And Bullingbrook my sorrow’s dismal heir.
...
And I, a gasping new-delivered mother,
Have woe to woe, sorrow to sorrow jointed.
(Ⅱ. ii. 62–66)

王妃が母親、グリーンが産婆、ボリングブルックは子供であるこの文脈では、いったい誰が父親であろうか。リチャードであろうか。それとも “my

sorrow” であろうか。例えば、「悲しみ」を男性と解釈することは、王妃の台詞に “Conceit is still derived / From some forefather grief.” (Ⅱ. ii. 34–5) とあるように、可能である。また、“heir” はどのように解釈されるだろうか。The New Cambridge Shakespeareでは“heir”に単に‘child’と注釈を付けているが、もっと限定して「世継ぎ」の意味で読むならばボリングブルックは“sorrow”の世継ぎなのか（王妃は単為生殖によってボリングブルックを生み出すのか？ 女性が単独で子供を生む場合、その子は鬼子か片輪か、いずれにせよ余り良い結果にならないことは各地の神話にも残っている）。それともリチャードの後を継ぐことを示唆しているのだろうか。後者とするならばこの“heir”は後にボリングブルックがリチャードに譲位される場面で “Cousin, I am too young to be your father, / Though you are old enough to be my heir.” (Ⅲ. iii. 203–4) とか、“I come to thee / From plume-plucked Richard, who with willing soul / Adopts thee heir, (Ⅳ. i. 107–9)（イタリクスは筆者）などで繰り返される“heir”に共鳴していくように思われる。

「悲しみ」を父親とする解釈は、後のリチャードと王妃の別離の場面に関連し、両性具有的解釈に可能性を与えてくれるようである。別れの悲しみは “So two together weeping make one woe.” (Ⅴ. i. 86) のように2人が結ばれ1つになる両性具有的婚姻の秘蹟を暗示している。肉体的には引き裂かれる運命であっても、リチャードと王妃の間で、「統一」は別離を通して逆説的に実現されるのである。

リチャードは別れに際して、悲しみにくれる王妃に次のように述べる。

Come, come, in wooing sorrow let’s be brief
Since, wedding it, there is such length in
grief.
(Ⅴ. i. 93–4)

王冠と王妃から “Doubly divorced!” (Ⅴ. i. 71) されたイメージと重なり合って、この悲しみとの婚姻のイメージが使用されている。悲しみはリチャードの配偶者であり、王妃の配偶者でもある。さらに、これは先の “Join not with grief, fair woman,” (Ⅴ. i. 16) という王妃への言葉の中の “join

with”を結婚するという意味に拡大し、王妃が悲しみと結婚して、鬼子のボリングブルックを出産するという単為生殖的解釈も可能にするであろう。

王妃の思考による出産のイメージはリチャードの思考の中にも対応して見られる。

My brain I'll prove the female to my soul,
My soul the father, and these two beget
A generation of still breeding thoughts,
And these same thoughts people this little
world
In humours like the people of this world, . . .
(V. v. 6-10)

Kimbrough は、この台詞のイメージは両性具有的であると指摘する。⁴¹⁾両性具有的な“soul”と“brain”の統一によって、自分の中の男であり女である要素によってリチャードは自己認識に到達するかに見える。リチャードは精神的な場所においてのみ、自分の子孫を持つことが出来るのである。が、この思考の中で生み出される様々な気質の子孫は、“a generation”と表現され、“child,” “heir,” や“son”などの言葉は用いられておらず、現実の家父長制社会では無益な子供達である。

だが、また、リチャードの生み出した思考たちは様々な逆説を示している。神の言葉の天国に入ることについての逆説を示し、諦念は王が奴隷であり奴隷が王である逆説的状况を生み出して行く。この五幕五場の独白を巡っては、リチャードの悟りの境地を表すものであるとか、他方では、自分の運命に関心を抱いていない人間の頭の体操にすぎないとか、自己満足にすぎないなど、様々な見解がある。このように振幅の大きい解釈を生むということは、この独白において表現しようとするものが、表現の技量を凌駕しているということなのであろうか。

男であり女である、男でもなく女でもない両性具有状態は、逆説的状况の中から対立するものの再統一、完全で健全なる理想状態を生み出すものである。unity, generation のイメージと連関するリチャードの両性具有的イメージが、この独白に収斂されていると考えれば、大きな正のイメージが、この独白で語られたリチャードの自己認識と悟りの境地の彩りとなっているといえよう。

ただし、リチャードの意識は最終的には全てボリ

ングブルックへとつながって行く。王と奴隷の逆説の中で“I am unkinged by Bullingbrook,”(V. v. 37)と述べ、また音楽を聴いて自分の愚かさ言及するときも“But my time / Runs posting on in Bullingbrook's proud joy / While I stand fooling here, his Jack of the clock.”(V. v. 58-60)となり、かつての愛馬の話をして“yet I bear a burthen like an ass, / Spurred, galled and tired by jauncing Bullingbrook.”(V. v. 93-4)というように我が身は必ずボリングブルックと比較されねばならない。更に、毒味を断る牢番に対して悪態をつけば、“The devil take Henry of Lancaster, and thee!”(V. v. 102)と言う。ボリングブルックに対するこのような強迫観念を見ると、リチャードは悟りを開いたとはとても思えない。自分への反省よりもむしろ、ボリングブルックへの対抗意識と篡奪者によって貶められた現状への不満とに、満ちあふれている。この繰り返されるボリングブルックへの意識の回帰を、いったん男性中心の家父長制社会の枠組みから逸脱したリチャードの心が、元の場所に戻っていったのだと説明することも可能であろう。両性具有的理想状態に達しながらも、本来の男性としての自己はどうしてもその状態とせめぎあうのである。シェイクスピアの念頭にあったのは、悟りきった無欠の聖人ではなく、もっと人間臭い悲劇的主人公の姿であったのかもしれない。

注

本稿は、1993年度の広島シェイクスピア研究会並びに日本英文学会中国四国支部第46回大会での共同発表をもとにして成ったものである。発表時、また後の別の機会に様々な批評、助言を戴いた方々にこの場をかりて、重ねてお礼申しあげたい。

シェイクスピアのテキストの引用は、すべて Andrew Gurr, ed., *The New Cambridge Shakespeare Richard II* (Cambridge UP, 1984) を使用し、引用箇所は本文中に括弧書きで示した。

- 1) Constance Jordan, *Renaissance Feminism* (Cornell UP, 1990) 158.
- 2) Constance Jordan, “Women's Rule in Sixteenth-Century British Political Thought,” *Renaissance Quarterly* 40: 427-30.
Leah S. Marcus, “Shakespeare's Comic Heroines, Elizabeth I, and the Political Uses of

- Androgyny," *Women in the Middle Ages and the Renaissance*, ed. Mary Beth Rose (Syracuse UP, 1986) 147.
- 3) Ernst H. Kantorowicz, *The King's Two Bodies: A Study in Medieval Political Theology* (Princeton UP, 1957) 7.
 - 4) Marcus 139.
Theodora A. Jankowski, *Women in Power in the Early Modern Drama* (University of Illinois Press, 1992) 60–61.
Jordan Renaissance Feminism 158–90.
 - 5) Arthur F. Kinney, ed. *Elizabethan Backgrounds* (Archon Book, 1990) 335.
 - 6) Marcus 139–41.
Jankowski 65.
 - 7) Marcus 143.
 - 8) Jankowski 61–62.
Jordan Renaissance Feminism 161.
 - 9) Marcus 143.
Robert Kimbrough, *Shakespeare and the Art of Humankindness* (Humanities Press, 1990) 51.
 - 10) Jordan RQ 426.
 - 11) Marcus 142–43; 148–49.
 - 12) Kimbrough 4.
 - 13) Mary Beth Rose, *The Expense of Spirit: Love and Sexuality in English Renaissance Drama* (Cornell UP, 1988) 88.
 - 14) Rose 88.
 - 15) Valerie Traub, *Desire and Anxiety* (Routledge, 1992) 119.
 - 16) Jeanne Addison Roberts, *The Shakespearean Wild: Geography, Genus, and Gender* (University of Nebraska Press, 1991) 70–73.
 - 17) 鈴木照雄訳『饗宴』プラトン全集5 (岩波書店, 1974), 47; 49; 50.
 - 18) Jonathan Dollimore, *Sexual Dissidence* (Oxford Clarendon Press, 1991) 296.
Kimbrough 9.
 - 19) Kimbrough 68.
 - 20) Hans Biedermann, *Dictionary of Symbolism* tr. James Hulbert (Facts on File, 1992) 11.
Jan Kott, *Shakespeare Our Contemporary*. tr. Boleslaw Taborski (Routledge, 1965) 215–16.
 - ミルチャ・エリアーデ (Eliade, Mircea) 『悪魔と両性具有』エリアーデ著作集第6巻 (せりか書房, 1973) 139–40.
 - 21) Biedermann 11.
エリアーデ 134.
Kimbrough 15.
荒井 献 「「見よ、私は彼女を(天国へ)導く」トマス福音書の女性観再考」『現代思想』2月号 (1992) 83–91.
 - 22) エリアーデ 134.
 - 23) エドガー・ウィント (Wind, Edgar) 『ルネサンスの異教秘儀』田中英道・藤田博・加藤雅之訳 (原書1958; 晶文社, 1986) 374.
 - 24) 荒井 87.
 - 25) 彌永信美「閉塞世界とグノーシスの〈光〉」『現代思想』2月号 (1992) 121.
 - 26) John S. Mebane, *Renaissance Magic and the Return of the Golden Age* (University of Nebraska Press, 1989) 3; 17; 20.
 - 27) ヨナス (Jonas, Hans), 『グノーシスの宗教』秋山さと子・入江良平訳 (原書1963; 人文書院, 1986) 157.
 - 28) ウィント 178.
Kimbrough 186–87.
Jan Kott, *Shakespeare Our Contemporary*, tr. Boleslaw Taborski (Routledge, 1965) 10–15.
 - 29) ウィント 179.
 - 30) エリアーデ 144.
 - 31) Peter Ure, ed., *The Arden Shakespeare Richard II*, introduction lvii–lix.
 - 32) Marcus 145.
 - 33) Mhilib C. McGuire, "Choreography and Language in *Richard II*." *Shakespeare: The Theatrical Dimension* (AMS Press, 1979) 84.
 - 34) Ure lvii.
 - 35) McGuire 64; 81.
 - 36) *Jordan Renaissance Feminism* 137.
 - 37) *Jordan Renaissance Feminism* 137.
 - 38) M. C. ブラッドブルック (Bradbrook, Muriel C.) 『歴史のなかのシェイクスピア』岩崎宗治・稲生幹雄訳 (原書1978: 研究社出版, 1992) 165–66.
 - 39) Alexander Leggatt, *Shakespeare's Political Drama* (Routledge, 1988) 69–70.

40) Leggatt 75.

（平成 7 年10月31日受理）

41) Kimbrough 24.